

氏 名 浅井 優一

学位の種類 博士(異文化コミュニケーション学)

報告番号 甲第362号

学位授与年月日 2013年9月30日

学位授与の要件 学位規則(昭和28年4月1日  
文部省令第9号)  
第4条第1項該当

学位論文題目 文書と儀礼の記号論:フィジー・ダワサム地域における神話と詩的テクストに関する言語人類学的研究

審査委員 (主査) 小山 亘

中谷 一

名和 克郎(東京大学東洋文化研究所准教授)

## I. 論文の構成と内容要旨

本博士論文は、「文書と儀礼の記号論：フィジー・ダワサム地域における神話と詩的テキストに関する言語人類学的研究」と題し、目次・本文・註釈・資料・参考文献を含め、301 ページから成る。本論文の構成は、以下の通りである。

### (1) 論文の構成

序

#### 第1章：記号論的導入

- 1.1 意識と無意識
- 1.2 言語相対性
- 1.3 詩と儀礼
- 1.4 テキスト化

#### 第2章：構造と歴史

- 2.1 サーリンズの構造
- 2.2 出来事の不在
  - 2.2.1 言霊とトーテミズム
  - 2.2.2 パース記号論の不在
- 2.3 サーリンズ以後
- 2.4 トーマスの歴史的転回
- 2.5 記号論的接合

#### 第3章：植民地政策と文書

- 3.1 フィジー諸島小史
- 3.2 初期植民地政策
- 3.3 ダワサム地域
  - 3.3.1 地理的概要
  - 3.3.2 集団構成
- 3.4 文書の秩序
- 3.5 議論構成と調査概要
  - 3.5.1 議論構成
  - 3.5.2 調査概要

## 第4章：首長位の系譜

- 4.1 首長位と即位儀礼
- 4.2 歴史の記号「アンディ・リティア」
- 4.3 二分された贈与／王位の「証左 (na ivakadinadina)」
- 4.4 儀礼を巡る集団間の思惑と「文書」

## 第5章：文書体制

- 5.1 作成方法
- 5.2 メタ文書化されたフィジー
- 5.3 「一般証言」あるいは象徴
  - 5.3.1 集団の「起源化」
  - 5.3.2 「氏族 > 系族 > 家族」のオントロジー
  - 5.3.3 宣誓
  - 5.3.4 テクストの詩的終焉と権威化した知識の序列
- 5.4 「氏族登録台帳」あるいは指標
  - 5.4.1 系族と土地所有／証言と台帳の対照ペア
  - 5.4.2 登記儀礼
  - 5.4.3 文書への「疑念」、「ズレ」への意識

## 第6章：儀礼、神話、文書

- 6.1 儀礼開催の画策
  - 6.1.1 裸の土地
  - 6.1.2 ペニ・ワンガの反応
  - 6.1.3 反対派の主張：マタニヴァヌアとサウトウラガ
- 6.2 神話的邂逅
  - 6.2.1 ナンボロ系族とナワライ系族の接触
  - 6.2.2 外来王「ナゾウ」
  - 6.2.3 言及指示的次元の整合性
  - 6.2.4 相互行為的次元の整合性と結束性
  - 6.2.5 古き正しき「道」
- 6.3 土地の民とよそ者
  - 6.3.1 長老会議

- 6.3.2 知らない・出来ない「よそ者」
- 6.3.3 認識論・行為論・存在論
- 6.3.4 出自の暴露
- 6.4 「土地」というオリゴ
  - 6.4.1 「従属モデル (hypotaxis model)」と「並列モデル (parataxis model)」
  - 6.4.2 リアルの所在

## 第 7 章：行政による承認、1930 年との指標的類像性

- 7.1 儀礼賛成派の主張
  - 7.1.1 三幅体フレーム
  - 7.1.2 土地の結束性
- 7.2 反対派の反論
  - 7.2.1 親族名詞・呼称
  - 7.2.2 偽文書の引用
  - 7.2.3 フレーム修復儀礼
- 7.3 相互行為的「転換」
  - 7.3.1 担当官の質問
  - 7.3.2 出自の暴露

## 第 8 章：知識とダイクシス

- 8.1 語彙のペア
  - 8.1.1 cake (delana)／ra
  - 8.1.2 liu／muri
  - 8.1.3 donu／cala
  - 8.1.4 二者間の「類像性」(donu, dina, mana)
- 8.2 最終審議後半／構造的転換
  - 8.2.1 mai／yani (アンディ・リティアの到来)
  - 8.2.2 政府の承認
- 8.3 神話の不在／不在の存在
  - 8.3.1 土地という「文書」
  - 8.3.2 心の中の本
  - 8.3.3 「引用」の連鎖と非決定性

## 第 9 章：儀礼ことばの民族誌

- 9.1 首長を「連れてくる」(kauta mai na Ratu)
  - 9.1.1 儀礼開催 (onset)
  - 9.1.2 定型の中の意図／侮蔑
  - 9.1.3 「道」(sala)
  - 9.1.4 最初の時への回帰
- 9.2 即位という「語彙化」
  - 9.2.1 ブレの内外的分節
  - 9.2.2 空間の詩的多層化
  - 9.2.3 象徴記号化
- 9.3 ヤンゴナを「飲ませる」(Veivagunuvi)
  - 9.3.1 凝固した 8 つの氏族
  - 9.3.2 「ビロ」の譲渡 (soli na bilo)
- 9.4 首長を「住ませる」(Veivakatikori)
  - 9.4.1 回顧的較正
  - 9.4.2 首長のことば／締めくくり (codafication)
  - 9.4.3 キリスト教による神聖化 (Lotu ni Veivakatikori)
- 9.5 儀礼の構造

## 第 10 章：映像的体制

- 10.1 DVD
  - 10.1.1 土地の決定
  - 10.1.2 割譲以前
- 10.2 「相克」のテキスト化
  - 10.2.1 伝令の道 (sala ni tukutuku)
  - 10.2.2 地の文の語り手
- 10.3 「土地」というメタ・ディスコース
  - 10.3.1 テクスチュアリティ
  - 10.3.2 「今ここ」の複製

## 第 11 章：記号論的総括

- 11.1 記号論的文化記述
- 11.2 文書から映像へのメディア的変容

11.2.1 従属から並列へ

11.2.2 ビロの譲渡とズレの修正

11.2.3 亡霊の憑依

11.3 ポストコロニアルの登記儀礼

結

添付資料 1 (調査許可書関連)

添付資料 2 (新聞)

資料 (地図・史料・統計)

参考文献

## (2) 論文の内容要旨

本論文は、フィジー諸島において、**1)** 20世紀初頭に、英国植民地政府と先住民系フィジー人との間で行われた土地所有集団の登記作業に際して作成され、現在に至るまで土地と社会集団の所有関係を規定している「文書」(『一般証言 (*Ai tukutuku raraba*)』及び『氏族登録台帳 (*Vola ni kawa bula*)』)と、**2)** 2010年4月15日からの3日間、タイレヴ (*Tailevu*) 地方最北部に位置するダワサム (*Dawasamu*) 地域において、30年ぶりに開催された最高首長 (*Ratu*) の「即位儀礼 (*veivagunuvi*)」、以上2つの出来事を、記号論系言語人類学の視座から記述・分析し、フィジー社会が記した植民地期から植民地期以後への文化的秩序の変容を明らかにしている。

本論は、概ね3部に分けられる。冒頭部では、マーシャル・サーリンズ (*Marshall Sahlins*) が提示した構造歴史人類学と、ニコラス・トーマス (*Nicholas Thomas*) による「文化の客体化」に関する論議を中心に、オセアニア人類学では二項対立的に論じられきた「構造」と「歴史」の両次元を、「儀礼」などの出来事を(メタ語用的)「テクスト化 (*entextualization*)」として捉えるマイケル・シルヴァスティン (*Michael Silverstein*) による記号論系言語人類学の一般コミュニケーション理論を基盤に接合しようと試みている。中核部では、a) 上記の文書の記載事項 — つまりダワサム地域の氏族・系族集団に付与された儀礼的義務、あるいは地位・序列の記載 — に忠実ではない集団が、地域の過去／神話についての語りに従事することを通じて、最高首長の即位儀礼を開催する正統性と文書に記載された序列の誤りを主張した過程と、b) その過去／神話を模した儀礼が、2010年にフィジー政府の承認を経て実行され、儀礼の一部始終が先住民系フィジー総務省 (*Ministry of Fijian Affairs*) 傘下のフィジー言語文化研究所 (*Institute of Fijian Language and Culture*) によって映像で記録され

た過程を、談話分析を用いて考察している。

以上の論議を経て、結論部では、**1)** 20世紀初頭の土地所有集団の文書化が、植民地政府の権威の基に、土地とそれを所有する社会集団 — 「土地の民 (*itaukei ni vanua*)」 — をテキスト化したのに対し、**2)** 2010年にダワサム地域で起きた儀礼の映像化は、植民地期には文書としてテキスト化された「土地の民」、彼ら彼女らが行う神話の語りや儀礼などの「相互行為」に、文書ないし政府を再テキスト化する権威が付与されていることを指標するものであることを指摘し、それが植民地期以後の現代フィジーを特徴付ける文化的秩序であると論じている。

\*

以下、章ごとの説明を附す。第1～2章では、本論文の理論的基底を成す記号論系言語人類学の一般コミュニケーション理論が、「意識と無意識」、「詩と儀礼」という観点から概観され、それに依拠して、フィジーを巡る文化人類学的議論、特にサーリンズとトーマスによる研究の性格と限界が同定されている。すなわち、まず、「神話的实践 (*mytho-praxis*)」という概念を要石に、構造(神話・象徴)と歴史(出来事・語用)の接合を企図したサーリンズの構造歴史人類学は、1) 「出来事」を儀礼的行為の遂行性に置き換えたため、2) 抽象名詞のペアとして現れる文化的意味範疇、つまり象徴構造／神話へと、語用の次元が還元され、3) 「今・ここ」で発現するテキスト化の有り様が不可視になっていると指摘している。次に、「構造」に焦点を当てたサーリンズに対して、「歴史」へと文化研究の焦点を移行したトーマスの「文化の客体化」に関する議論は、1) 植民地的接触という出来事の効果として発生した対照性を成す文化的意味範疇が、2) 人々の意識化の標的、つまり対照ペアとなり、それが意識化の過程を通して、3) 個々のコンテクストに関わらず、前提可能性が高い文化的ステレオタイプ、すなわち、象徴構造／神話へと形象化するという記号作用を論じたものであることを明示化している。

第3～5章では、フィジーの初期植民地政策の特徴が概観され、植民地期以降のフィジー社会が、「文書」という語用的契機を基点にして形成／テキスト化されてきたことを明確にしている。初めに、19世紀末に植民地政府下で設置された先住民所有地委員会 (*Native Lands Commission*) が、フィジーにおける土地所有の単位集団として「系族 (*mataqali*)」、その上位集団として「氏族 (*yavusa*)」、下位集団として「家族 (*tokatoka*)」を規定し、氏族の移住伝承や氏族内部の構成、それら構成集団に付与される儀礼的役割、あるいは地位・序列を記録した『一般証言』、それに照応した集団ごとの構成員を登記するための『氏族登録台帳』、以上2冊の文書を作成したことが論及される。その後、『一般証言』が厳重な管理の下、一般への公開が抑制される

一方、『氏族登録台帳』は、随時、成員の登記（書き込み・修正）が可能な名簿として機能し、成員の登記作業を通して、「氏族 > 系族 > 家族」というフィジーの階層的な社会秩序が徐々に一般化したことが、文書の記載事項が詳細に分析されることをもって明らかにされている。

第 6～8 章では、本研究の調査地であるダワサム地域では、2009～2010 年に、文書に記載された集団間の序列の真偽が取り沙汰されたことが論及されている。そして、地域に存在した過去の首長位の系譜が途絶えた原因が、文書の「誤った」序列の記載にあり、したがって、「文書以前」（植民地期以前）に遡る地域の過去／神話を体現する首長即位儀礼を実行することによって、文書に記された序列を覆そうとする思潮が高まったことが、当該地域の古老による神話の語りの記述を通じて考察されている。さらに、そうした神話の語りに対して、言語学的な知見を導入した分析が為されている。例えば、a) それら古老による神話の語りが、典型的な文化的価値を指示する語彙のペア、それと整合する直示（ダイクシス；*deixis*）のペアが駆使された、強い一貫性と結束性を伴う語りであること、b) それらの語りの形式と、植民地期の文書の記述形式が比較対照され、前者が氏族集団の連合としての地域を「並列的／排他的」に叙述する形式（パラタクシス；*parataxis*）を持つのに対し、後者は、首長を頂点に据えて「階層的／従属的」に記述する形式（ハイポタクシス；*hypotaxis*）を有していること、その含意などが指摘されている。

第 9 章では、ダワサム地域では 28 年ぶりに開催されるに至った、最高首長の即位儀礼（*veivagunuvi*）の分析が行われている。そして、それが文書における序列の記載の誤りを指摘した集団が解釈した地域の過去／神話を模して構造化されていること、さらに、そうした儀礼の実行によって、a) [儀礼開催賛成派：首長（神）：土地の民：最初の正しい土地の神話] と、b) [儀礼反対派：悪魔：よそ者：現在の誤った植民地期の文書]、この対照性を有した相互行為的テキストが生成され、前者の等式が後者の等式を覆すことで、文書秩序が遡及的に取り消されたという過程が、3 日間に及ぶ儀礼全体の時間・空間の構成や、様々な儀礼スピーチが記号論に依拠して詳細に記述されることを通じて明確にされている。

第 10 章では、儀礼の一部始終が、先住民系フィジー総務省傘下のフィジー言語文化研究所によってビデオで撮影され、DVD による映像記録として保管されたという過程が考察されている。DVD では、文書の記載に忠実ではない仕方で開催された儀礼が、「土地における決定（*Iewa vakavanua*）」に基づいたものであったことを強調するナレーションが政府役人によって吹き込まれ、DVD の著作権がフィジー言語文化研究所に属するものとなったこと、他方、その編集過程では、儀礼を実行した氏

族・系族がナレーションを「監修」したこと、その含意が論じられている。

以上の考察を経て、結論部である第 11 章では、**1)** 20 世紀初頭、英国植民地政府が実施した文書編纂が、政府の顕在的権威の基に「土地の民」（土地と社会集団）をテキスト化したのに対し、**2)** 2010 年にダワサム地域で起きた即位儀礼を巡る出来事の映像化は、文書という植民地期の権威／超越的外部と、文書によって生み出された経験的／非顕在的威信の所在としての「土地の民」、この両者が取り憑いた「今・ここ」に、社会文化を規定する審級が帰される秩序を指標する出来事であり、それが植民地期を経た今日のフィジー社会を特徴付ける文化的秩序であると結論付けられている。

## II. 審査の結果の要旨

### (1) 論文の特徴

オセアニアを巡った文化研究は、20世紀初頭のホカート（A. M. Hocart）の王権論に端を発し、マーシャル・サーリンズの「外来王」に結実する神話や儀礼の構造主義的研究、また、19世紀後半から20世紀初頭に掛けてメラネシア各地で観察され、「カーゴ・カルト（Cargo Cult）」などと呼ばれた社会運動に関するピーター・ワースレイ（Peter Worsley）やマーサ・カプラン（Martha Kaplan）らによる研究の系譜、さらに、80年代以降のニコラス・トーマスやロジャー・キージング（Roger Keesing）らによる、文化の歴史性や政治性に焦点を当てたポスト・コロニアリズム的転回など、構造、儀礼、歴史などの問題を巡る文化人類学的議論を中心に展開してきたと総括しうる。

一方で、これらの文化人類学的論議においては、各々の議論や研究の枠組みを体系的に布置しうる理論的基盤が欠如しており、その結果、それぞれの議論は対立的に位置づけられたり、各々の命題に特化した経験主義的／機能主義的な研究となる傾向を有したりするなど、議論間の対比的な関係自体によって、それぞれの議論が存立可能となってきたと回顧できる。本論文は、マイケル・シルヴァスティンが提示した「テキスト化」という記号論系言語人類学の一般コミュニケーション理論を基盤に、文化研究と研究対象を含む全ての文化現象が共起する「今・ここ」のコンテクストに、構造、儀礼、歴史の問題系を基礎付け、それによって、フィジー／オセアニアを巡る文化人類学的諸議論を論理的一貫性の基に布置し、それらの体系的な接合を試みる理論構築を実践している点に、その特徴があると言える。

以上のように、本論文は、フィジー／オセアニアの文化人類学的諸議論を、記号論系言語人類学の理論に依拠して精査したことにより、植民地化から脱植民地化以降へという、フィジー社会における文化変容の軌跡を、テキストとコンテクスト、この両次元の嵌入の仕方とその変遷の有り様として、十全に記述・分析することを可能にしている。すなわち、1) 「階層性／従属性」が前景化した植民地期の文書の記述形式と、「並列性／排他性」が前景化した今日の神話の語りや儀礼の形式、以上の両者の形式的相違、2) 文書の記載事項に忠実ではない仕方で計画された首長の即位儀礼が、政府の了承を経て実行・映像化され、文書の秩序が覆された事例、主として以上2つの出来事に焦点化しつつ、長期の現地調査で得られた様々なテキストの言語学的分析を基盤に、それらのテキストを生成している社会文化的コンテクストを審らかにしたこと、ここに本論文の独創性を見い出すことが出来よう。

## (2) 論文の評価

本論文は、幾つかの点で評価できる。

第一に、現代言語人類学への貢献、とりわけ、長くオセアニア文化研究の拠点となってきたフィジーにおける儀礼や首長制の問題系を、現地語（フィジー語）での緻密な談話分析を基盤にした、記号論系言語人類学の枠組みにおいて正面から扱った点である。

これまでオセアニア地域では、サモアにおける言語使用と政治性について論じたアレサンドロ・デュランティ（Alessandro Duranti）、フィジーのインド人ディアスポラの言語使用について論じたドナルド・ブレナス（Donald Brenneis）、パプアニューギニアの言語変容とシンクレティズムの関係を論じたドン・クリック（Don Kulick）、ベラウの神話生成スキーマとその歴史の変遷を議論したリチャード・パーメンティア（Richard Parmentier）などが、重要な言語人類学的研究として位置付けられてきた。本論文は、これらの研究と基本的視座を共有するものであるが、とりわけパーメンティアが展開したベラウにおける神話の歴史に関する分析に強い親和性を持っている。パーメンティアの議論では、神話と歴史がパース記号論に依拠して接合され、ベラウの神話的スキーマの歴史の変容を議論可能にしたが、その一方で、ミクロな場で展開する具体的な相互行為の諸相、言い換えれば、個々の談話テキストにおいて、「言われていること」（言及指示的機能）と「為されていること」（社会指標的機能）の関係を通して進行するコンテキスト生成過程の、言語学的な知見を援用した記述・分析は、幾分手薄となっている。

これに対し、本論文は、植民地政府によって作成された文書、調査地域で観察された日常的な会話や神話の語り、公的な会議での談話記録、さらに儀礼スピーチや儀礼の映像記録など、それぞれに異なるジャンルに範疇化されうる談話テキストに焦点を当て、それらを言語学的な知見を援用して緻密に分析することによって、地域内部で展開する政治的対立と、それを通じて創出されるフィジーの社会文化的秩序を、多角的に且つ動態的に考察可能にしている。さらに、そうした考察を行うことを通して、ミクロとマクロ、言語と社会文化の実質的な相互嵌入の有り様を明らかにする記号論系言語人類学の研究地平の中に、とりわけサーリンズ以来、オセアニア文化研究の拠点であり続けてきたフィジーにおける儀礼や首長制という主題を取り込んだ点に重要性がある。

第二に、フィジー／オセアニア文化人類学への貢献である。ホカート、サーリンズ以来の構造主義から、トーマスの歴史人類学、つまり「文化の客体化」に関するポスト・コロニアリズムへの転回は、サーリンズの二項対立的な神話図式の不十分さや

イデオロギー性を指摘し、フィジー内部の多様性を照射した点で価値ある研究成果を産み出した。一方で、そうした転回は、「外来王」の神話図式に経験主義的な脚注を加え続け、サーリンズの二項対立を再生産するように機能したと回顧しうる。すなわち、この意味での構造から歴史への転回は、人類学の非歴史性を批判する意図が先行し、実際の調査から得られるデータとは、幾分迂遠な関係しか持たない植民地期以前の事象を実証的に扱う傾向を持つ結果、「歴史」へと意識を向ける人類学者たち自身を含んだ今日のフィジー社会、まさに歴史の所在を、適切に記述する枠組みを持ち得なかったと言えるだろう。

他方、本論文は、植民地期以来、フィジー社会の基底に存在してきた文書の記載事項や記述形式を詳細に分析すると同時に、それを、そのような歴史文書へと意識を向ける現代フィジー、つまり歴史文書を<読む>という「今・ここ」において生起する相互行為の次元／コンテクストへ基礎付けた記述・分析を試みている。したがって、フィジーにおける歴史に纏わる人類学的研究と志向性を共有しつつ、これまでは主に言及指示内容に焦点が当てられてきた歴史文書を、その記述形式・形態に降り立って分析することで、1) それがどのようにフィジー社会をテキスト化し、歴史文書に意識を向ける今日のような社会を生成したのか、2) 今日のフィジーにおいて為される儀礼や神話の語りが、どのようにして、それら歴史文書を前提として生起可能となっているのか、以上の点を、相互行為的的局面へと投錨して明らかにした点に、本論文がフィジー／オセアニア研究において切り拓いた新機軸を見い出せるだろう。また、フィジーにおける植民地期の文書や首長即位儀礼でのスピーチ、神話の語りに関するフィジー語での談話分析を用いたアプローチは他に例を見ず、その意味で、際だった実証的な価値も有している。

第三に、本邦の人類学における言語人類学的研究の導入としての価値が挙げられよう。本邦の人類学では、90年代以降、「コミュニケーション」を志向した研究が、日常会話の分析を全面に押し出した民族誌などを通じて、その存在感を増してきた。他方、これらの研究では、「意味・構造」と「身体・感覚」という図式が二項対立的に措定され、後者に前者を超克する契機、自他の境界や表象のイデオロギーを乗り越える基点が見い出された結果、コミュニケーション出来事が意味や構造を前提として生起し、その出来事の効果／帰結として「自他」や「身体」はイデオロギー的に創出され変容してゆくという（メタ語用的）「テキスト化」の過程は不可視となっていると言える。

こうして本邦では、以上のような（メタ語用的）「テキスト化」の過程に焦点を当て、言語と社会文化の実質的な関係性を解き明かそうとする記号論系言語人類学的

研究は、社会言語学や語用論などの一部を除き存在せず、その視座が人類学的研究において持つ重要性は、十全に認識されていない状況にある。本論文は、そうした記号論系言語人類学を、フィジーでの民族誌的データの分析を基にして、明示的に人類学的な領域で実践・応用しようと試みたものである。その限りにおいて、本論文は、本邦の人類学における、言語研究と文化研究の体系的な接合を試みる言語人類学に依拠したエスノグラフィーの萌芽として位置付けることが可能であり、その点で画期的であると言えよう。

他方、指摘すべき問題点もある。課題の一つは、本論文がサーリンズとトーマスの接合を標榜しているが、その接合が理論的（ないし図式的）接合に留まっており、歴史人類学的な文献研究がやや手薄になっている点である。それに関連して、冒頭部での理論的考察と、中核部以降の調査地域での事例分析との間に、若干の乖離が見られる点を指摘できるだろう。さらに、構造から歴史へという転回を記号論の観点から整理する一方で、それ以後の転回、例えば、マリリン・ストラザーン(Marilyn Strathern) などによる論議が、記号論的に精査し切れていない点も指摘しうる。また、儀礼の開催を通して文書の権威が覆された調査事例から、現代フィジー社会を映像的体制として特徴付けているが、具体的にどのようにして、映像が今日のフィジー社会を規定する媒体となっているのかについての考察も不十分である。再帰的な文化記述を提唱している点に関連して言えば、オセアニアの人類学的研究と、その研究対象であるオセアニア社会が、どのようにして互いを再帰的にテキスト化してきたのかについての論議も、幾分不明瞭である。

\*

このように本研究は、未解決の問題点を残すものの、前述した独自性、丹念な現地調査に裏付けられた議論の精度と実証的価値は損なわれるものではない。本研究は、包括的な理論的考察と緻密な談話分析、その独創的な統合の試み、以上を通して、高水準の研究成果を導き出していると評価できる。